

伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長 本田 研一

朋遊館を過ぎると、正面に農協が見えてくる。左手に野尻モーターズの車が並び、販売車に目をやり車を走らせる。すぐに左折し山手に登ると、豪壮な和式建築の家が目に入り、あと五キロ進むと、永野へと至り大分へと進む。

戦後に植えられたであろうか、路線にそって杉の木立が目線を遮り出します。

そのまにまに見え隠れする阿蘇の山々に、お通りになった秩父宮殿下が、車を止められ見入られたと聞き領けます。

素晴らしいその風景は、今は成長した木々が遮り見通しが悪くなったものの、往時この道路越しに見えた阿蘇の山々は、旅人の心を癒すに充分であつたろうし、素晴らしき阿蘇の自然にふれるに

最高の地点であります。

大分と県境を接する永野まで、野尻の中心地点より約五キロ。集落と集落を結ぶ距離は、その約五キロをもつて、古代からの集落を形成させてきたようです。

なだらかな坂道を進むと、奥まった箇所にも永野の集落が見えてきます。県道が樹齢五百年は過ぎていいると思われる、大銀杏の樹の下を通り、その銀杏の樹には、過ぎた時代を映すかのよう



▲永野口番所跡

なものが付着し、成長しています。佇む石仏に手を合わせます。やがて関所跡の看板が目に入ります。

野尻地区は、宮崎県高千穂系の方言と、大分県竹田系方言に影響を受けています。この永野は、大分系方言に最も強く影響を受けています。

県境の集落として発展してきた永野は、高森峠を思わせる様な峠を下ると、大分県に入ります。豊後の国大分より運ばれてきた、ありとあらゆる生活用物資は、関所跡の標本がある現在町議の甲斐氏宅にあつめられました。

その関所に運ばれてくる物資のなかで、最も貴重であつたものが、「塩」でありました。どうやら阿蘇全域の「塩」は天草産ではなく、大分からの「塩」であつたようです。

貴重かつ重要な物資「塩」の取引は、やがてそれらを中心とした私達地域の商圏を、戦後間もない頃まで豊後大分圏としました。

現在は銀杏の樹の下を、県道が関所跡の甲斐氏宅前まで直通で走っており、ますが、関所が機能していた頃までは、その関所前は河川で遮られておりまし

た。物資を積んだ牛馬車や人は、関所前を右折し、その河川を迂回するように進んでいました。

関所跡からゆるやかに大分方面へ下ると、「うそぐいの滝」の看板が眼に入ります。

この「うそぐいの滝」の名称は俗称で、正式な名称ではないらしいのですが、すっかり定着しています。この滝は、地域の人でも限られた猟師さん等しか知らない滝でありました。

最初の看板から約二キロ、とうてい離合など出来ない細いコンクリート道路を、かなりおりて行きます。途中ビールハウスの作業所があり、それを見ただけで安心してしまいうような、そんな気がする、まさに秘境とよぶにふさわしき所です。

やがて車が四台は置ける滝の入り口に着きます。そこからがじつに急な坂道をおりてゆきます。やがて滝の音が聞こえ始めます。沢山の湧き水があり「うそぐいの滝」が姿をあらわします。最近多くの人達を知るようになったこの滝。故郷のすごさを体験しました。